

田村穂隆歌集

『湖とファルセット』

(現代短歌社)

鮮烈で、深い余韻を読後に与えてくれる  
第一歌集だ。

押し殺してきた感情が押し花になれば  
いいのに リボンを選ぶ

もう二度と だけどあなたを受け入れ  
てしまう更地が確かにあって

剃き出しの肉だ、朱肉は。ゆつくりと  
苗字を肉に沈めていった

生きていく痛み、生きづらさという分か  
りやすい言葉からはみ出してしまうものが  
詩の形に昇華されている。作品からはは  
きりとした実感を伴った痛みが伝わる。身  
体感覚の確かな痛みから醸し出されるのは、  
まるごとの生の実感である。

祖父は父を父はわたしをわたしはわた  
しを殴って許されてきた

わたしから父が産まれるのが怖いわた  
しは怒鳴ることができない

生まれ育った家族の歴史の中の「父」  
の存在感と、父に連なる自己の間での葛藤  
が歌集の核にもなっている。ファルセット  
の歌が聞こえてくる。

(斎藤 美衣)

米川千嘉子

『雪岱が描いた夜』

(本阿弥書店)

時代を大きくつかみつつ、個々人の問題  
に還元してゆくの巧みな作者。この第十  
歌集でも、ここ三十年ほどの日本を総括し、  
深く深い考察を詩にしている。

平成はクリアファイルの時代なりうち  
重なりてしづかに曇る  
支持率のそれでも上がる国にあって電車  
のひとをつくづくと見る

二首目は、秩序を崩しつづけた首相を支  
持する若者がいることへの訝しさ。それは  
誰なのかどこにいるのか。生身の個人のは  
ずだが、個々の顔が見えない怖さ。そう、  
米川の歌には現実の怖さを静かな筆致で抉  
り出してしまふ怖さがある。

限界に挑む独居といふべしや手押し車  
がちりちりと来る

老いをうたがひやがてほんたうの老い  
に入るほんたうの場所を誰も知らねど  
これはひとを蔑する料理と憤れば若者  
にただほほえまれあつ

諸処の問題を自分に惹きつける。そこに  
言葉の重みと真実性加わる。時代と対峙  
する歌の強さだ。

(大松 達知)

小島なお・千葉聡共著

『短歌部、ただいま部員募集中!』

(山波書店)

「高校三年生になると前後して半年く  
らい、私は苦しんで登校してました」と  
いう小島なおの学生時代のエピソードや、  
高校教諭でもある千葉聡から読者への「無  
理して学校へ行くことはない」という励ま  
しの言葉が印象的な中学生向けの短歌の本。  
小島は苦しいなかで出会った、

あきかぜの中のきりんを見て立てばあ  
あわれといふ暗きかたまり

高野公彦『汽水の光』  
に自分は「暗きかたまり」でいいんだとい  
う安堵のような思いを得たという。「学校  
よりも、君自身のほうが大事」と読者に語  
りかける千葉がそのあとで紹介する一首。

学校は直角の場所 ゆうぐれにテスト  
ひとたば持ちてあゆみく

吉川宏志『鳥の見しもの』  
は心の重さを苦しさだけではなく確かさと  
して捉え直させてくれる力、得体の知れな  
い不安を言語化する面白さを教えてくれる。  
短歌を作ってみたい!となったら本書後半  
で小島家のタマスケと一緒に吟行や歌会へ  
も行けるようです。

(松井 恵子)